

行田市及び一般社団法人行田おもてなし観光局（埼玉県行田市）

行田花手水 week 及び希望の光

行田市

市長

行田 邦子



1. 行田市の概要

行田市は、埼玉県の北部に位置し、東京からはJRで70分の距離にあり、北は利根川、南は荒川の二大河川が流れている肥沃な穀倉地帯にあるまちです。人口は約7万8千人（令和5年9月末時点）、面積は約67.37km²で、市内全域が平坦な地形であり、風水害や降雪等による災害の少ないまちで、市内にある埼玉地区（さきたま）が埼玉県名発祥の地として広く知られています。

市の中心部を歩くと、土蔵、石蔵、モルタル蔵など多彩な足袋の倉庫「足袋蔵」の姿を見ることができます。行田足袋の始まりは約300年前といわれており、武士の妻たちの内職であった行田足袋が、やがて名産品として広く知れ渡り、昭和初期の最盛期には全国の8割の足袋を生産し、「足袋の行田か行田の足袋か」と謳われるほどの日本一の足袋のまちと呼ばれるまでに発展しました。

平成29年4月には、行田足袋や足袋蔵、埼玉古墳群などを構成資産とする「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」のストーリーが県内初の日本遺産に認定されました。

さらに本市には、国宝「金錯名鉄剣」が出土した稲荷山古墳をはじめ、日本最大級の円墳である丸墓山古墳など9基の大型古墳が群集する国の特別史跡「埼玉古墳群」、古代種であり、市の天然記念物に指定されている「行田蓮」の他、42種類約12万株の蓮の花が咲き誇る「古代蓮の里」、ギネス世界記録[®]に認定された世界最大の田んぼアートなど、行田のまちを歩くことで、古代から現代までの歴史・文化・自然を楽しむことが出来ます。



日本遺産に認定されている行田足袋

2. 活動開始の背景・経緯

本市の中心市街地は、15世紀後半に成田氏によって築城され、城下町行田の発展の基礎となった「忍城」や名産品として広く知れ渡り、最盛期には全国約8割の足袋を生産するまでに発展し、それと共に明治時代後半から次々と建てられていった「足袋蔵」、さらには多数の神社仏閣等により趣ある歴史的景観を形づくっています。



行田市のシンボル「忍城」

このようなまち並みが広がる中、令和2年4月に、行田八幡神社がコロナ禍における参拝者へのおもてなしとしてスタートした、水鉢を季節の花々で美しく飾る「行田花手水」がSNS等を通して話題となり、本市への来訪者も徐々に増加していきました。そこで、この好機を活かし、歴史的景観を高付加価値化することで、交流人口を増やし、地域経済の活性化に繋げるため、行田八幡神社周辺の商店や民家の軒先にも花手水を飾り、来訪者に市内を周遊しても

らう『行田花手水 week』を令和2年10月に開催しました。

さらに、他地域の花手水と一層の差別化を図ることや地域課題でもある来訪者の滞在時間を延伸することを目的に、令和3年4月からは毎月一夜限定で、「和」をテーマとしたライトアップイベント『希望の光』を始めました。

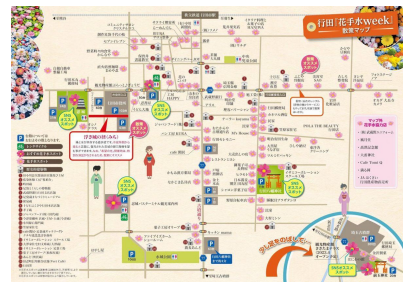


行田八幡神社の行田花手水

3. 活動の内容

《地域と協働でのおもてなし》

『行田花手水 week』は当初約10軒からスタートしましたが、「花が持つ効果」と「成功体験」により現在約100軒まで広がっています。



『行田花手水 week』散策マップ

まず、「花が持つ効果」によりまちが明るくなり、住民同士で「今回も綺麗ね」のような会話が自然と生まれ、参加者が近隣住民を誘う形で取組みの輪が拡大しています。

また、花手水を軒先に飾ると入店ハードルが下がり、商売にも好影響が生じている様子を受け、「自分のお店にも飾りたい」という好循環（「成功体験」）が生まれ、この積み重ねも

参加者増加に繋がっています。

こうした結果、2021年1月には約30軒、同年4月には約50軒、同年12月には約70軒、そして現在に至っており、地域一体でのおもてなし活動となっています。



広がる行政と商店、民家との連携の輪

《創造的な活動》

花手水自体は、「行田花手水」をスタートした時点において、既に他地域の神社仏閣において実施されていました。しかしながら、商店や民家等と連携し、地域一体となり花手水を飾る取り組みは『行田花手水 week』が初めてであり、その点がメディアやSNS等で大きな話題を生むこととなりました。

また、当活動への参加者もそれぞれが工夫を凝らしており、生花と共に例えば、煎餅屋は煎餅を、和菓子屋は饅頭と一緒に浮かべる等本市ならではの楽しみを来訪者に提供しています。

さらに、本市には豊富な歴史的遺産があり、こうした資源と花手水の融合による本市ならではの映えるコンテンツの造成やまちの広範囲を会場にしたライトアップを毎月開催する点は他地域との差別化を生んでいます。



煎餅屋の花手水

《持続可能な仕組み》

当活動は、参加者がスタート時に必要となる水鉢と浮き球（装飾用）、LEDライト（ライトアップ用）は主催者より無償で貸し出しています。

一方で、花代やライトアップセッティング等の経常的な負担は参加者が自己負担しています。これにより、参加ハードルを下げつつ、主催者側の経常的負担を抑えることができ、これまで『行田花手水 week』については計33回（令和5年9月末時点）の開催を実現しています。

また、「希望の光」では花手水のライトアップをはじめ、忍城や社殿のライトアップ、和傘や竹灯籠等による全演出を主催者や各施設スタッフ等地域内のヒトのみで実施しています。これにより、開催費用を抑えるだけでなく、活動のノウハウを地域内で蓄積することにも繋がっており、これまで計22回（令和5年9月末時点）の開催を実現しています。



忍城のライトアップ

4. 成果

《地域の賑わい及び経済の活性化》

当活動が牽引し、主要観光施設入込客数は令和元年（当取組実施前かつコロナ前）に約45万人であったものが、令和4年は約72万人に、観光消費額は令和元年に約5億8千万円であったものが、令和4年は約18億8千万円といずれも大幅に増加しており、来訪者の増加及び消費の拡大に大きく貢献しています。



『希望の光』開催時の様子

《認知度の向上》

当活動が牽引し、観光公式サイト閲覧数は令和元年に約39万プレビューであったものが、令和4年は約154万プレビューと大幅に増加しています。

また、当活動はこれまで、各新聞社やテレビ等のメディアに数多く取り上げていただいております。本市の知名度向上及び地域のブランド力向上に大きく貢献しています。



忍城の行田花手水

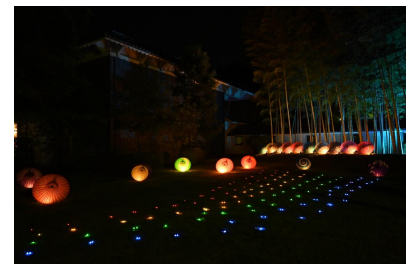
5. 課題と展望

当活動の新たな展開として、コロナにより地域との繋がりが希薄となってしまった埼玉県立行田特別支援学校との連携を令和5年10月よりスタートしました。連携内容は、『希望の光』において、忍城の一部を生徒達が作業学習の時間に制作したお皿等を活用して、演出を行うというものです。ライトアップ当日は、多くの来場者から感動の声をいただき、実際に作業した生徒達も当日現地を訪れ、非常に喜んでくれました。こうした連携を通じて、生徒達の小さな成功体験に繋がったり、イベント協力という校外での活動機会をつくることで、地域に開かれた学校づくりに繋がっていきます。

今後も『行田花手水 week』と『希望の光』を通じて、分野間の連携を図りながら観光まちづくりを進めていきます。



行田特別支援学校との連携



生徒が制作したお皿を活用したライトアップ